

東北地方 3 か月予報

(2 月から 4 月までの天候見通し)

平成 1 8 年 1 月 2 5 日
仙台管区气象台発表

< 予想される向こう 3 か月の天候 >

向こう 3 か月の出現の可能性が最も大きい天候は以下のとおりです。

この期間の平均気温は平年並、降水量は平年並、東北日本海側の降雪量は平年並が多いでしょう。

2 月 冬型の気圧配置となる日が多く、時々強い寒気が南下するでしょう。東北日本海側では平年に比べ曇りや雪の日が多く、東北太平洋側では平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

気温は平年並か低い、降水量は東北日本海側で平年並か多い、東北太平洋側で平年並でしょう。

3 月 気圧の谷が数日の周期で通過し、通過後は一時冬型の気圧配置となるでしょう。東北日本海側では平年と同様に曇りや雪または雨の日が多く、東北太平洋側では平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

気温は平年並、降水量は平年並でしょう。

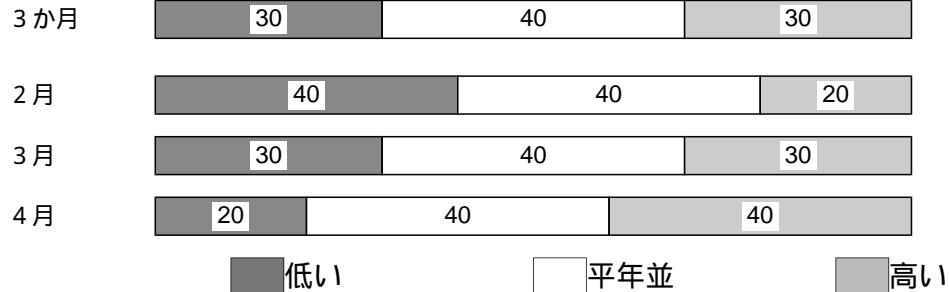
4 月 天気は数日の周期で変化するでしょう。東北地方は平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

気温は平年並か高い、降水量は平年並でしょう。

< 向こう 3 か月の気温、降水量、降雪量の各階級の確率 (%) >

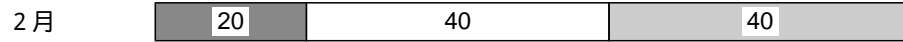
< 気温 >

[東北地方]

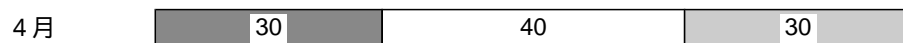
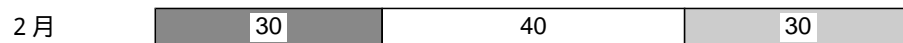


< < 降水量 > >

[東北日本海側]



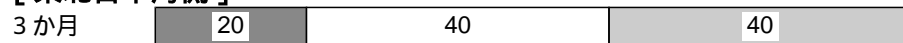
[東北太平洋側]



■ 少ない □ 平年並 ■ 多い

< < 降雪量 > >

[東北日本海側]



■ 少ない □ 平年並 ■ 多い

< 次回発表予定等 >

1 か月予報：毎週金曜日 14時30分 次回は1月27日

3 か月予報：2月23日(木) 14時

暖候期予報：2月23日(木) 14時

< 参考資料（ 平年並の範囲等 ） >

（ １ ） 平年値（月・ 3 か月平均気温、 降水量、 降雪量）

	気 温 ()				降 水 量(mm)			
	2月	3月	4月	2月～4月	2月	3月	4月	2月～4月
大船渡	0.9	3.5	9.0	4.4	58.2	91.8	138.0	288.0
新庄	-1.0	2.0	8.1	3.0	145.3	112.1	98.3	354.2
若松	-0.4	3.0	9.9	4.1	70.2	63.9	63.4	197.5
深浦	-0.2	2.6	8.3	3.6	77.3	78.3	93.3	248.8
青森	-1.1	2.0	7.9	2.9	116.0	69.5	60.7	246.2
むつ	-1.5	1.4	7.2	2.4	84.9	77.3	81.1	243.9
八戸	-0.9	2.3	8.3	3.2	52.7	51.6	58.9	163.2
秋田	0.2	3.2	9.2	4.2	92.0	93.0	117.6	302.6
盛岡	-1.6	1.8	8.4	2.9	54.9	80.1	93.8	228.8
宮古	0.3	3.0	8.7	4.0	79.6	85.9	96.3	261.8
酒田	1.4	4.2	9.8	5.2	115.3	103.5	105.5	324.3
山形	-0.2	3.1	9.8	4.2	70.2	66.5	68.1	204.8
仙台	1.7	4.5	10.1	5.4	48.4	73.0	98.1	219.5
石巻	0.9	3.7	9.2	4.6	44.3	70.3	91.8	206.4
福島	1.8	4.9	11.3	6.0	49.8	76.9	79.5	206.2
白河	0.5	3.6	9.8	4.6	41.4	71.1	100.5	211.5
小名浜	3.7	6.2	11.1	7.0	61.9	106.1	128.3	296.2

	降 雪 量(cm)			
	2月	3月	4月	2月～4月
大船渡	27	13	1	41
新庄	242	134	20	396
若松	160	74	6	241
深浦	114	53	3	170
青森	205	97	9	311
むつ	160	95	7	262
八戸	103	56	6	164
秋田	120	51	2	172
盛岡	98	60	6	163
宮古	72	47	5	124
酒田	119	43	1	162
山形	147	71	3	222
仙台	31	15	1	47
石巻	24	11	1	36
福島	73	34	3	110
白河	51	32	3	86
小名浜	7	2	0	9

欠測により平年値を求めるための資料年数（観測値のある年数）が各月毎に異なることなどにより、 3 か月平年値等が各月の平年値から求めた値と一致しないことがあります。

（ ２ ） 1971 ～ 2000 年のデータに基づいたこの予報期間の地域平均の気温、 降水量、 降雪量の平年差（ 比 ）の「 平年並 」の範囲は次のとおりです。

要 素	予報対象地域	2 月	3 月	4 月	2 月 ～ 4 月
気温平年差 ()	東北地方	-0.4 ～ +0.5	-0.4 ～ +0.4	-0.3 ～ +0.5	-0.3 ～ +0.4
	東北日本海側	-0.3 ～ +0.4	-0.4 ～ +0.4	-0.5 ～ +0.6	-0.4 ～ +0.4
	東北太平洋側	-0.4 ～ +0.6	-0.4 ～ +0.3	-0.5 ～ +0.5	-0.3 ～ +0.4
降水量平年比 (%)	東北地方	80 ～ 109	87 ～ 111	89 ～ 112	95 ～ 108
	東北日本海側	95 ～ 108	90 ～ 109	90 ～ 110	97 ～ 105
	東北太平洋側	69 ～ 117	78 ～ 120	84 ～ 113	91 ～ 109
降雪量平年比 (%)	東北地方	78 ～ 118	78 ～ 117	27 ～ 115	78 ～ 118
	東北日本海側	87 ～ 115	79 ～ 118	27 ～ 139	90 ～ 115
	東北太平洋側	73 ～ 119	66 ～ 106	13 ～ 89	73 ～ 118

< 参考資料（利用上の注意） >

（１）気温（降水量、降雪量）等は、「低い（少ない）」「平年並」「高い（多い）」の３つの階級で予報します。階級の幅は、1971～2000年の30年間における各階級の出現率が等分（それぞれ33％）となるように決めてあります（気候的出現率と呼びます）。

（２）予報する確率の数値は、それぞれの階級が出現する可能性の大きさを表しています。予測資料の信頼性が大きい場合には気候的出現率から大きく隔たった10％以下や60％以上の確率を付けられますが、特定の階級を強調できない場合には気候的出現率と同じかそれと同程度（30％、40％）の確率しか付けられません。

（３）晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い（少ない）場合は「平年に比べて多い（少ない）」、また平年の日数と同程度に多い（少ない）場合には「平年と同様に多い（少ない）」と表現します。なお、単に多い（少ない）と表現した場合には対象期間の2分の1より多い（少ない）ことを意味します。

東北地方 3 か月予報解説資料 (2~4 月)

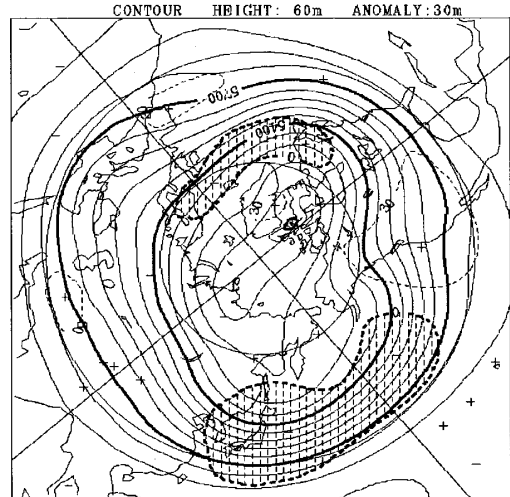
平成 18 年 1 月 25 日 仙台管区気象台

1. 数値予報 (アンサンブル予報) による大気の流れの予想

3 か月平均の 500hPa 高度と偏差の予想図 (右図):

日本付近は大陸東岸から日付変更線の東に広がる弱い負偏差域に覆われる。一時強い寒気の影響を受ける見込み。

3 MONTH MEAN (2/ 1- 4/30) N:31
500hPa HEIGHT AND ANOMALY



3 か月平均の 500hPa 高度と偏差の予想図
等高線: 60m、偏差: 30m、陰影部: 負偏差

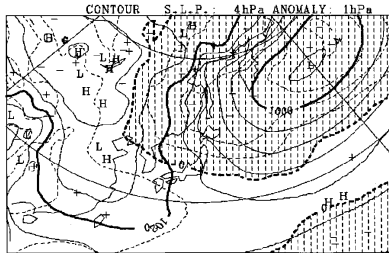
月別の地上気圧と偏差の予想図 (下図。なお、予想図の精度は予想対象期間が先になるほど低下します。):

2 月: アリューシャンの低気圧は負偏差 (平年より気圧が低い) 大陸の高気圧は正偏差 (平年より気圧が高い) となっている。北日本を中心に冬型の気圧配置が強く、時々強い寒気が南下する見込み。

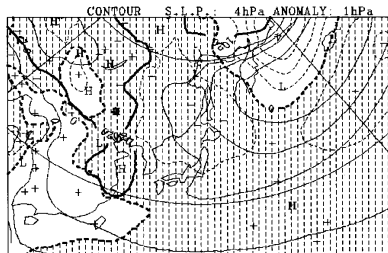
3 月: 日本海や本州南岸に等圧線のくびれがみられ、低圧部となる。平年同様気圧の谷が数日の周期で通過し、通過後は一時冬型の気圧配置になる見込み。天気は平年と同様に東北日本海側は曇りや雪または雨の日が多く、東北太平洋側は晴れの日が多い見込み。

4 月: 西日本を中心に高気圧に覆われる。東北地方は、気圧の谷が数日の周期で通過し、天気は数日の周期で変化するが、高気圧に覆われ晴れる日のほうが多い見込み。

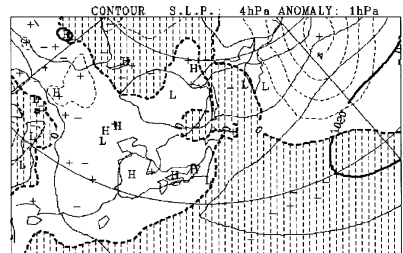
S.L.P. AND ANOMALY



S.L.P. AND ANOMALY



S.L.P. AND ANOMALY

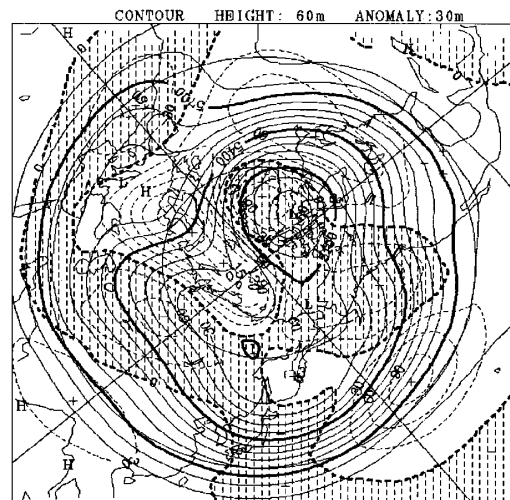


月別の地上気圧と偏差の予想図 (左から 2 月、3 月、4 月)

等圧線: 4hPa、偏差: 1hPa、陰影部: 負偏差

2. 循環場の特徴

1 月 (予想図を含む): 500hPa 高度では、日本付近は負偏差で寒気が南下しやすい。ただし、12 月までのように、持続性の高い大気の流れ (極付近が正偏差で、強い負偏差域がユーラシア大陸の東 ~ 北太平洋東部、北米東部、ヨーロッパを覆うようなパターン) ではなく、持続的に強い寒気が南下する状態ではなかった。このため、東北地方は、1 月上旬は低温だったが、中旬は平年並となった。

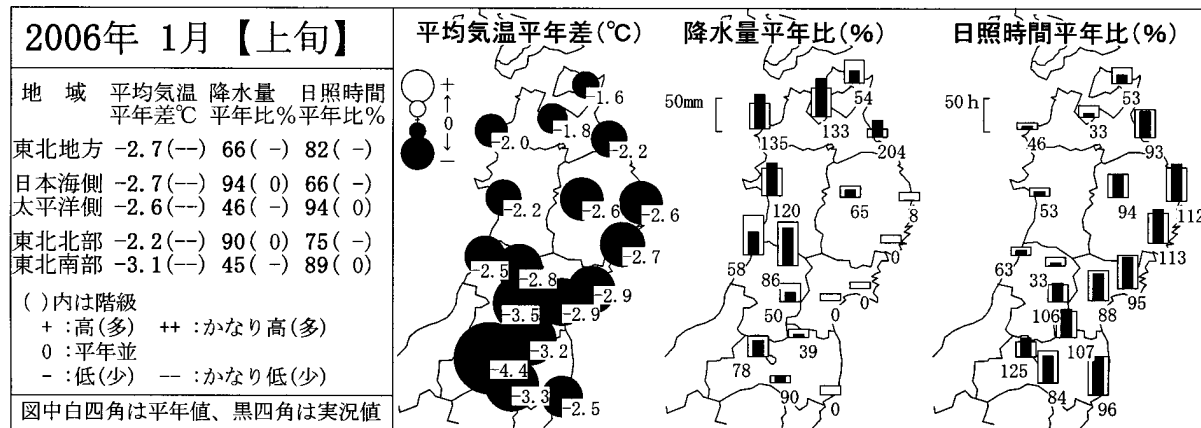


1 月平均 500hPa 高度 (予想値を含む)
等高線: 60m、偏差: 30m、陰影部: 負偏差

3. 最近の天候経過

1月上旬：期間のはじめは一時冬型の気圧配置がゆるんだが、その後は冬型の気圧配置が続き、強い寒気が南下した。東北日本海側では雪の日が多く、大雪となる日もあった。東北太平洋側では晴れの日が多かった。

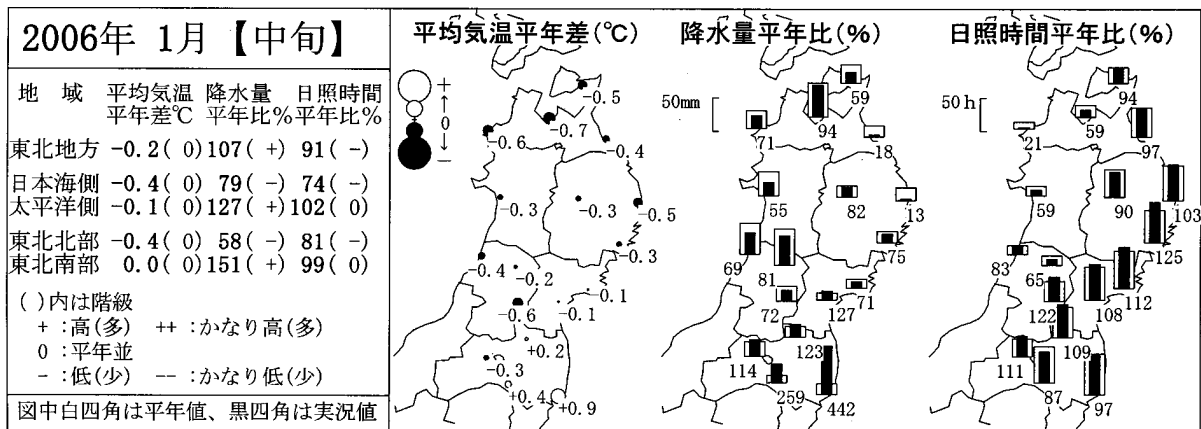
平均気温はかなり低い。降水量は東北日本海側で平年並、東北太平洋側で少ない。日照時間は東北日本海側で少なく、東北太平洋側で平年並。



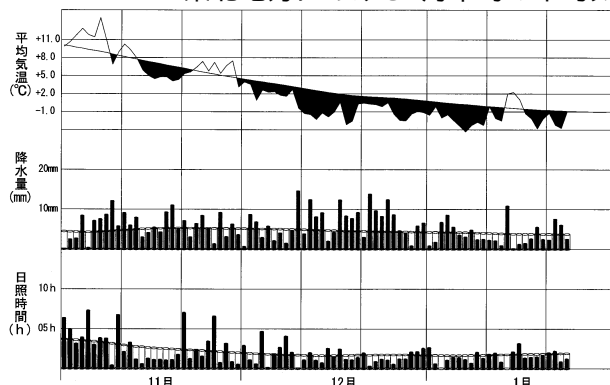
東北地方における1月上旬の平均気温、降水量、日照時間平年差(比)

1月中旬：13～14日にかけて日本海と本州南岸をそれぞれ別の低気圧が通過した。低気圧に向かって暖かい空気はいったため各地で高温となり、まとまった雨となった。また16日は寒冷前線が通過し、東北日本海側では雨や雪となった。その他の日は冬型の気圧配置となり、気温は平年を下回り、東北日本海側では曇りや雪の日が多く、東北太平洋側では晴れの日が多かった。

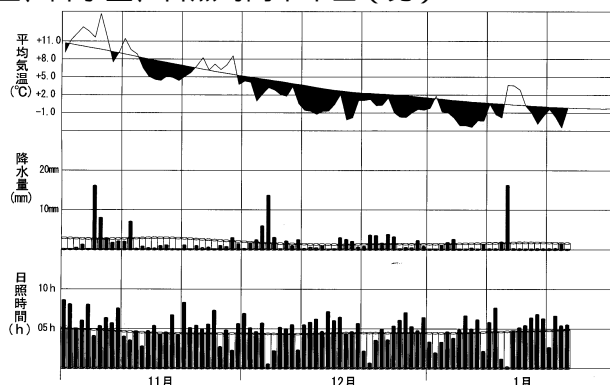
平均気温は東北地方で平年並。降水量は東北北部で少なく、東南北部で多い。日照時間は東北日本海側で少なく、東北太平洋側で平年並。



東北地方における1月中旬の平均気温、降水量、日照時間平年差(比)



東北日本海側の日別経過図



東北太平洋側の日別経過図

気象官署の日別観測値と日別平年値の地域平均(気温：実線と点線、降水量・日照時間：黒い円柱と白抜き円柱)

4．太平洋赤道域の海水温等の状況、及びエルニーニョ現象等の今後の見通し

[エルニーニョ監視速報](#)（No.160）より抜粋。（気象庁ホームページ：<http://www.jma.go.jp/>）

太平洋赤道域の海面水温は、東部の負偏差が強まり、負偏差域は中部まで広がった。海洋表層（海面から深度数百mまでの領域）の水温は、西部で正偏差、東部で負偏差が11月より顕著となった。西部太平洋熱帯域で対流活動が活発で、大気下層では中・西部で東風偏差が卓越した。

エルニーニョ監視海域の海面水温は、冬から春前半にかけて基準値（1961～1990年の30年平均値）より低い値で推移し、その後基準値に近づくとみられる。

【解説】

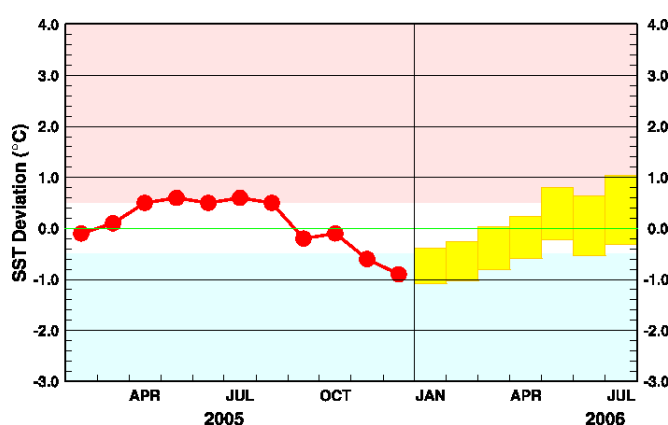
12月の太平洋赤道域の海面水温は、11月に引続き東経160度を中心として正偏差が見られたが、東部では西経110度付近を中心に負偏差が強まり、負偏差域は中部まで広がった。12月のエルニーニョ監視海域の海面水温の基準値との差は、11月の ± 0.6 から ± 0.9 となった（下図）。この中・東部の負偏差の強まりは、11月中旬以降に東経150度から西経160度を中心に東風偏差が継続し、12月中旬に強まった結果であると考えられる。

東部太平洋赤道域では、4月から8月まで継続した海面水温の正偏差が9月に負偏差に転じ、10月から12月にかけてはその負偏差が増大し、その範囲も西に広がった。海洋表層の水温では東部で負偏差、西部で正偏差が11月より顕著となった。また、インドネシア付近を中心とした西部熱帯域での対流活動が強まり、大気下層においても中・西部で東風偏差が卓越している。

この状態は、大気と海洋が双方の偏差を相互に強めあう傾向があり、中・東部太平洋赤道域における海面水温の負偏差傾向が直ちに解消することは考えにくい。

エルニーニョ予測モデルは、監視海域の海面水温が、冬から春前半にかけて基準値より低い値で推移し、その後春後半から夏にかけて基準値に近い値で推移すると予測している（右図）。

以上のことから、監視海域の海面水温は、冬から春前半は基準値より低い値で推移し、その後基準値に近づくとみられる。ただし、この負偏差が春の間も継続するなど、春以降の状況によってはラニーニャ現象となる可能性がでてきたので、今後の推移を注意深く監視していく。



エルニーニョ予測モデルによるエルニーニョ監視海域の海面水温予測（基準値との差）

この図は、エルニーニョ監視海域の海面水温（基準値との差）の先月までの推移（折れ線グラフ）とエルニーニョ予測モデルから得られた今後の予測（ボックス）を示している。各月のボックスは、海面水温の基準値との差が70%の確率で入る範囲を示す。（基準値は1961～1990年の30年平均値）

< 参考資料 >

平年の天気出現日数（日）

	2 月		3 月		4 月	
	東北日本海側	東北太平洋側	東北日本海側	東北太平洋側	東北日本海側	東北太平洋側
晴れの日	6.6	17.9	13.3	19.8	16.8	18.2
雨の日	16.6	7.0	14.0	8.3	10.9	8.9

注：季節予報では、「日照率 40%以上の日数」、「日降水量 1mm 以上の日数」をそれぞれ晴れの日、雨の日の目安として用いている。この2つの事象は同じ日に起こりうるため、両方に数えられる日もある。なお、日照率は1日の日照時間を可照時間（太陽の中心が東の地平線に現れてから西の地平線に没するまでの時間）で割った値である。